

平成 23 年度
松阪市山里の未来研究会
「研究・活動」報告書

平成 24 年 3 月

目 次

I 活動報告

第1章 櫛田川グループ（飯南、飯高地域）	1
1 「山里支援プログラム」の実現にむけて	3
2 「山里版市民活動センター（仮称）」の設置 —その必要性和開設にあたって—	6
3 その他の取組み	8
参考資料「中間報告書」より抜粋	9
第2章 やまゆりグループ（阪内・勢津町、宇気郷地区、嬉野宇気郷・中郷地区）	11
1 地域の活性化の指針は？	13
2 研究員の今後の活動は、いかにあるべきか	15

II あとがき	17
---------	----

III 資料編

研究会経過	21
名簿	23

第1章 櫛田川グループ(飯南・飯高地域)

《 櫛田川グループ 》

はじめに

このレポートでは、平成22年度末にまとめた中間報告書のなかから、実現に向け研究を深め具体化を試みた2点について報告します。私どもの取り組みをよりご理解いただくためにも、参考資料「そのⅠ・Ⅱ」P9・10をご覧ください。

(1) 「山里応援プログラム」の実現に向けて

このプログラムの目的、趣旨、イメージについては、中間報告書で提起しました。(中間報告書参考資料「そのⅠ」P9及び、本報告書P3 図表参照)

その後の研究は中間報告までに積み上げた内容について、実現の可能性や具体化の視点から進めてきました。

そして、昨年波瀬栃谷地区にて三重大学の協力を得て行った高齢者及び過疎地支援活動を検証した結果、ひとつの根本的な研究素材が浮かび上がってきました。「地域や個人は外部支援を必要としているか、どのような応援を求めているのか」ということです。支援のニーズを調査する過程で、このプログラムは当初個人への支援を念頭に作成したものでしたが、集落への支援も存在することがわかってきました。現在とはともかく、5年後10年後に外部支援を必要とする集落が増えると予想されます。

個人への支援の難しさ

個人に対する応援に関して次のようなことが問題となります。

- (ア) 応援を受ける住民個人では、応援者に対するホストとなるのが難しいケースが予想できる。
- (イ) 応援者と応援を受ける地域住民のコーディネートが難しい。
- (ウ) 交換内容(本報告書「P3」山里応援プログラムのイメージ 参照)の把握が容易でない。

このように、最初から個人への支援を目指すと、このプログラムが持続的に展開できなくなる恐れが生じます。

まずは集落支援からスタート

そこで、プログラムの実施当初においては、「コミュニティ単位でそのコミュニティが望む内容について応援を求めていく。そして、応援者に対しては、山里独自のサービスを提供する」という方法が現実的であろうと考えます。

応援の内容の実例をあげるなら、用水路の掃除、除草・草刈り、獣害対策の金網設置、イベント（夏祭りなど）のサポートです。

自治会単位でこのプログラムを実施することは、宿泊場所には集会所を利用するなど、住民の負担も少なく、受け入れ易さ、取り組み易さの利点があり、プログラムの核となる支援内容を調査把握することが比較的スムーズに行われると思います。

実施にあたっては、その地域住民（集落）に次のようなことが留意点として求められます。

- (ア) このプログラムの目的や意義を共通認識として理解する。
- (イ) 支援内容に関して合意を得ると同時に、その限度を理解しあう。
- (ウ) 一人ひとりが応援者と信頼関係を築くよう努める。

個人への支援に展開

集落への支援の体験と実績、応援者と地域住民の信頼関係の構築を基に、よりきめ細かい住民個人の暮らしへの支援につながる仕組みに、展開が可能になると考えます。

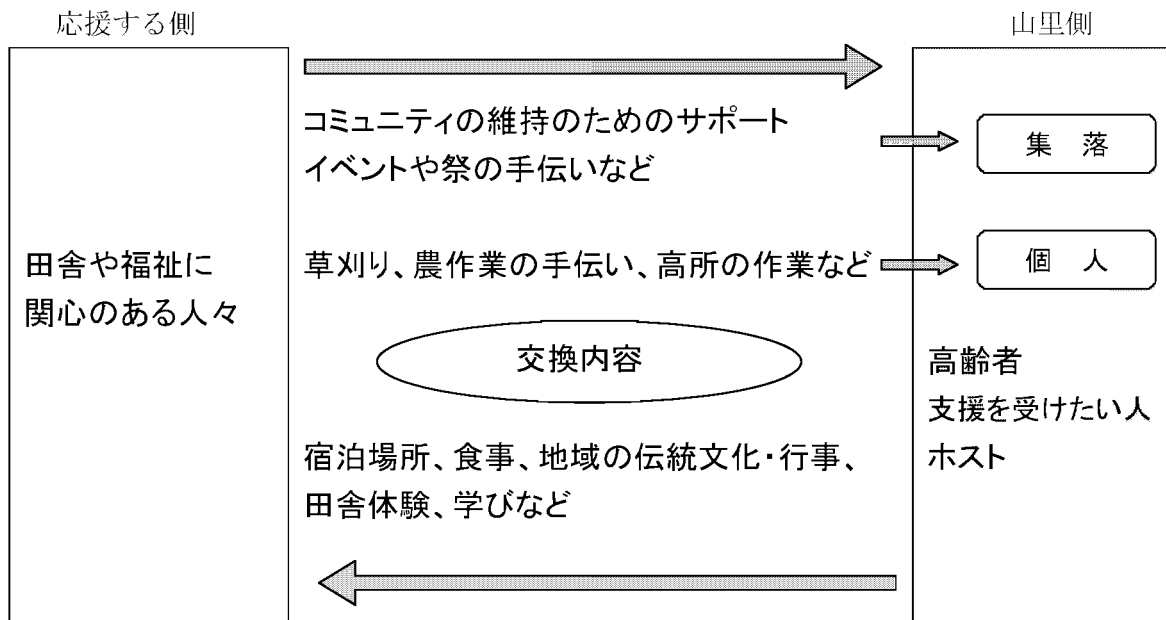
実現に向けて

実際にこのプログラムを実行するには、情報の収集や発信を担う事務局（コーディネーター）が必要になります。

そこで、後述する「山里版市民活動センター（仮称）」の機能の大きな柱として位置づけるのが最良と思われれます。

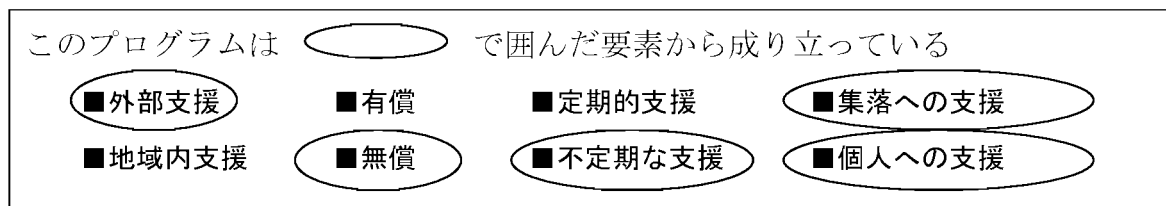
最後に、地域住民に対してこのプログラムの説明会を開催するなどして、理解と普及に尽力するのは行政の重要な役割となることを付け加えます。

山里応援プログラムのイメージ



※ホスト（宿泊場所・食事を提供する人）と支援を受ける人が同一である必要はない。

山里応援プログラムの構成要素



補足

- (1) 外部支援のもたらす副次的効果は、三重大学の協力を得て平成23年9月に行ったテストケースでも明らかになった。地域の良さや可能性の再発見再認識など。
- (2) 行政サービスはもとより、NPOなどの地域内支援のさらなる充実を期待し、同時に協力体制を築くことも重要と考える。

(2) 「山里版市民活動センター（仮称）」の設置

－その必要性と開設にあたって－

設置の必要性

「山里版市民活動センター（仮称）」（以下「山里センター」という）の目的や機能は中間報告書でも示しました。（中間報告書参考資料「そのⅡ」P9参照）

櫛田川流域の観光や交流の拠点というだけでなく、地域内のNPOなどの集会や相互交流の場としての役割も求められます。今後、住民自治の成熟を促進する上でも、住民による住民のための基地が必要です。また、研究会の最終目標である「みんなが安心して暮らせ、幸せを実感できる地域の実現」にはQOL（註）を高める仕掛けと情報も欠かせません。

ここに重ねて提案する山里センターは、多機能多目的の山里活性化総合施設です。そのおおまかな姿は次のページをご覧ください。

開設にあたって

開設にあたっては、準備委員会を立ち上げ、そこで方向性と概要を決めます。地域住民から広く意見や希望を募ることは、関心を持ってもらう意味からも有効な手段だと思われます。準備委員会（あるいは準備委員会から移行した運営委員会）が、実際どんな事をやっていくのか、重要性、緊急性、取り組み易さなどを考慮の上、判断と決定をし、実行に移すのが手順として考えられます。

山里センターの運営形態や資金については、中間報告書で提案したもの（中間報告書参考資料「そのⅡ」P9参照）を踏襲しますが、実行計画の過程でより良いアイデアが出ることを期待します。施設の設置をどうするか、最大の問題です。基本的な考え方は中間報告書で示したものと変わりません。踏み込んで言えば、地理的条件や、駐車場の確保の点から、旧飯高駅舎が最適だと考えます。

山里センターの設置運営には地域住民の関与と参画を色濃くしていくために、住民協議会と密接な関係が不可欠です。この点から地域住民のため、山里未来のため、管内の住民協議会のいっそうの機能強化が早急に求められます。

（註） QOLとは、Quality of Life(クオリティ・オブ・ライフ)の略称で物理的な豊かさやサービスの量だけでなく、精神面を含めた生活全体の豊かさと自己実現を含めた概念。

山里センターでは

このようなことが

・山里応援プログラムのコーディネート

おいしい情報・ふれあい交差点

- ・観光案内、集合場所、休憩所
- ・山里ハローワーク(註:1)
- ・地域のマイスター紹介(註:2)
- ・空き家情報提供・・・など

ちいさな出会い・豊かな山里暮らし

- ・NPOの集会
- ・ギャラリー
- ・趣味のグループの集い
- ・ミニコンサート
- ・各種講習会
- ・早起きバザール・・・など

一杯の coffee とおばあちゃんの一皿

- ・週末カフェ
- ・日替わりシェフ食堂
- ・手作りたべもの食べ比べ大会・・・など

(註:1) 山里ハローワーク

飯南・飯高地区は、その地域柄、山仕事や農業の臨時雇用がしばしば発生する。
地域内の事業所の求人情報とともに臨時雇用情報を提供する。

(註:2) 地域のマイスター紹介

この地域を訪れた人々や市民に地域らしさを堪能していただくことを目的とし、
あらかじめ登録されたいわゆる名人、達人あるいはアドバイザーを紹介する。

(3) その他の取り組み

櫛田川グループでは、研究途中のもの、始めたばかりのものを含め、いくつかのテーマをかかえたままになっています。残念ながら全体像を報告できるまでに至っていませんが、下記の項目についても何らかの形で継続されることを希求し、ここでは項目のみを記すにとどめます。

- ① トレッキングコース構想
- ② 住民参加による「集落の未来予想図（10年後）」の作成
- ③ 櫛田川流域ツアー（櫛田川をテーマに多気町、明和町と連携して）
- ④ 「山里マイスター制度」の確立

◀ 参考資料 ▶

そのⅠ

中間報告書 P 3より抜粋

① 山里応援プログラム

これは田舎や福祉に関心のある人々と山里の住民の交換・交流プログラムである。

田舎や福祉に関心のある人々にその力を提供してもらい、代わりに宿泊場所と食事を彼ら彼女らに提供するシンプルな仕組み。

互いの関係にお金は介在せず、むしろ交流を大切に考えたい。高齢者の支援を中心に考えられたものだが、仕事で忙しい人や援農等にも広く利用できる。

今後、行政（振興局）と民間（住民協議会やグループ）が話し合い、このプログラムが展開されることを期待する。

全体のイメージと実施にあたってのイメージは次ページのとおりである。

そのⅡ

中間報告書 P 5より抜粋

② 山里版市民活動センター（仮称）

「田舎での住みやすさ」の向上を目的と仕組みとして、以下の「山里版市民活動センター（仮称）」の設置を提案する。

○ 機能・目的

（ア）情報の発信と収集の場

センターは、地域の情報を収集し、それを整理し発信する機能を持つ。飯南・飯高地域は、櫛田川に沿って大変距離のある細長い地域であり、情報がうまく伝わらないという困難さがある。そこでセンターでは、ホームページやケーブルTV、「センターだより」などの媒体を使い、これらの情報の発信を行うとともに、地域に呼びかけ、さまざまな情報を収集する。

（イ）NPO等支援

地域には、まだ数は少ないが、社会貢献を行うNPOがいくつか存在する。また、飯高町「月出の甲」ではブランド米を販売し、波瀬では「クレソン」を生産・販売して地域の活性化を図るなど新しい動きがある。それらの活動に対して、PR、情報提供、あっせん、ミーティングの場の提供、講習会など人材育成の面で支援する。

(ウ) 支援者、ボランティアとニーズのマッチング

暮らしに役に立つ支援情報があっても、それが伝わらないために活用できなかつたり、逆に、生活に困っている人がいても、それに手をさしのべることができなかつたりすることが多々ある。そこで、助けが必要な人・家庭とそれを支援できる人、ボランティアなどとの間を橋渡し（パンフレットやボランティア情報などのパネルの設置、電話での紹介）をすることにより、生活を支援する。

(エ) 交流の場

地域住民同士、また、地域住民と訪問者との交流ができる場として、気軽に立ち寄れるラウンジとしてのスペースを持つ。

(オ) 集会施設

地域の住民やNPO等が集会を行うことができる40人程度が入れるスペースを提供する。

(カ) 空き家バンクの運用

田舎暮らしを望む都会人は多くおり、実際に田舎に家を求め住まわれることもある。このための空き家バンクの紹介と体験用家屋の管理運営を行う。

○ 施設の規模と設置施設例

センターの規模は、20人程度の人がかつろげるラウンジと40人程度の会議室、そして事務所があり、常勤の事務員と館長（非常勤）の2人程度の職員を持つ施設とする。

ただし、この職員の人件費は、半ボランティアベースとして、この活動に賛同を得る地域の住民やNPOなどの協力を得ることにより抑えることが考えられる。

また、場所の候補としては、新たに新築するのではなく、空き事務所、旧飯高駅などの空き店舗等の活用が費用の面から望ましい。

○ 運営形態と資金

センターの運営は、例えば、飯南・飯高の8つの住民協議会がそれぞれ年間15万円程度の会費を出す任意の組織をつくり、この会費と貸会議室運営収入、NPO等のあっせん料、体験用空き屋の賃貸料、活動を応援してくれる人からの寄附金などの収入等により行う。

第2章 やまゆりグループ

(阪内・勢津町・宇気郷地区・嬉野宇気郷地区・中郷地区)

《やまゆりグループ》

はじめに

山里の未来研究会「やまゆりグループ」においては、昨年度末の「中間報告書」において、過去2年間の取組みについて一応のまとめを行ったところです。

その時点では、多くの課題も指摘し行政へも提言を述べさせていただきました。そして、更に今年度1年間かけていろいろのテーマに取り組みました。

その集約について、中間報告書に引き続くものとして報告します。

「自然と共に心豊かな生活を山里に築く」という基本理念に基づき、研究を重ねたものです。

(1) 地域の活性化の指針は？

地域は過疎・高齢化が進行し、それをはばむすべを実行することは困難です。私たち研究員は、その過程にあって何をすべきかについて議論し、行動も起こしました。

まずは、高齢化を少しでも阻止しようという課題は

山里に住みやすい環境を整備することです。その結果として移住が促進できることが最大の目的です。

その要点として次のような点について取組みを進めました。

(ア) 地域に明るさと楽しみを作り出す工夫として、従来から地域行事・イベントの在り方を検討し、まずは「住民みんなで作る」を基本にしたものでなければならないという認識で一致しました。

そのためには、住民みんなが考え、参加することが必要であることが基本です。研究員の果たすべき役割は、地域のリーダーとして原点からの参加が必要です。

その際に、いかなるリーダーシップを発揮できるかが、まさに山里の未来研究会の真価の発揮しどころです。

その一例として、研究会では、地域の「花カレンダー・マップの作成」「EM石鹸を利用したガードレールの清掃」、「昔の道マップの作成・その道の検証」などを研究の成果として実施し、地域にも提案し一部実施もし

たところですが。今後も、まずは各地域の住民協議会に提案し、各地域での実施に向けた行動を実行したいと考えています。

(イ) イベントなど各種地域行事は、地域に他の地域から多くの人々の参加が期待できるものにしていくことが重要です。また、「民宿」など宿泊施設の設置も重要です。

(ウ) 究極の施策として、県の施策などに則っての取組みが進んでいる地域もあります。これは、国の補助を受けて古民家を改修して地域おこしに活用しようという施策であり、Iターンの体験施設、定住住宅としても利用可能かと考えています。

その結果として、I・Uターンを促進することができれば、地域の活性の最大の効果になるものと考えています。

過疎・高齢化を阻止することは、移住・定住の促進が最も効果的であるとの認識です。

地域の課題として、次の点を指摘することができます。

(ア) 山里には、前述のごとく古民家の空き家が多く存在します。その改修や流通について、地域の住民協議会・自治会などがその任を果たすことが特に重要です。地域にマッチした移住者を確保するために、効果的であろうと考えています。そして、山里の未来研究員は積極的に提言し関わっていくことが重要です。

(イ) 生活環境として、水道のない宇気郷・嬉野宇気郷地域においては、生活用水の確保に知恵をしぼる必要があります。2～3世帯程度の小グループごとに井戸を確保するとか、また、旧屋敷跡などの古井戸の確保・再活用などの取組みが考えられます。これも、研究員の提言から一部実現している地域もあります。

(ウ) そして、何よりも大切なのが、「地域住民との融和」です。これも研究員の出番ではないかと考えています。地域の歴史的行事や各種イベントなどにうまく溶け込んでいただく手引きは、研究会活動の成果を発揮する場となるでしょう。

特筆すべき成果は

特筆すべき成果として、山里の未来フォーラムにおいて披露した「山里の未来汁」なるオリジナル「豆乳汁」が生まれたことがあげられます。

これは今後の地域イベント等に利用され多くの人にふるまわれることが期待できます。

また、補足すれば、山里の未来研究員は、地域を知り、地域を歩き・考え、多くの研修の成果を会得できたことがあげられます。

(2) 研究員の今後の活動は、いかにあるべきか

この報告書をもって山里の未来研究会は、一応の幕を閉じます。しかし、山里の生活は地域住民がその地域の存続を望む限りにおいて永久に続きます。

私たちは、今後は地域の一住民として、積極的に果敢に地域活動に取り組んでいくことが求められています。そのための今後の活動を次のとおり考えています。

- (ア) 研究員は、これまでの研究テーマを積極的に地域に提案し、その実現のための行動に果敢に取り組むを進めることが大切であること。
- (イ) その手法は、様々であろうが特に地域の「住民協議会及び自治会」等に深く関わって提言・活動することが大切であること。
- (ウ) 地域・各種団体との関わりのなかで、必要に応じ自主研究会をグループとして実施していくことも重要であると考えます。

おわりに

山里の未来研究会の参加の機会を与えられたことに深く感謝申し上げ、今後研究員はますます地域で活躍していくことをお誓い申し上げます。

——あとがき——

フラジャイルな国土を山里でしなやかにしたたかに生きよう

20年前から見続けている悪夢の話です。・・・最後の燃料で飛ぶヘリコプターから下を覗くと、かつては山々の間を走っていた軽トラックや県外ナンバーの車はすっかり姿を消し、道路がまるで散乱した白骨のようにみえる。都会のマンションで、お腹を減らしたこどもが、最近まで冷蔵庫と呼ばれていた箱を開ける。すると、真っ暗な中から淀んだ空気が流れ出てこどもを襲う・・・

時代認識や社会的立場や愛郷心（要注意、地域エゴと紙一重）も異なるメンバーが、ひとつの目標に向かって突き進む難しさと面白さを痛感する2年間でした。昨年度は、地域を元気にする木の「種」を探し中間報告書にまとめました。この一年は、その種をせめて「苗」にしたいと取り組んできました。限られた時間と能力で、どこまで丈夫な苗に育てられたかわかりませんが、この先は、地域の方々と行政がいっしょになって、花も実もなるよう育て上げてほしいと思います。我々の役目はとりあえずここまでです。

2月に開催したフォーラムのチラシに、山里の本来と未来がたっぷり入った山里の未来汁とあったのですが、あれは、なんだかよくわかりませんよね。確かに野菜はたっぷり入っていましたが。でも、当日山里の未来汁をふるまうまでを振り返るとどうでしょう。寒い時期だから何か温かいものを参加者に提供したら、という意見が出されました。これは、まさに「もてなしのこころ」ですね。それが決まるとレシピを考え、みんなで家にある食材を持ち寄り試作を重ねました。メンバー同士の交流も結束も深まったように思います。このような過程に、山里の本来の良さと未来の可能性の一端を垣間見たような気がするのです。

あとがきのタイトルが長過ぎたからというわけではないのですが、詳しく書くスペースがなくなってきました。国土ばかりでなく、壊れやすいのは、この国の社会システムも同じです。どんな優れたシステムにも賞味期限や耐用年数があるのでしょうか。山里でしなやかにしたたかに生きる方法を、別の角度から語り合える機会があればと思います。

山里の未来研究会長 岩 男 安 展

資料編

研究会経過.	21
山里の未来研究会研究員名簿.	23

研究会経過

平成23年度

第1回	平成23年	5月31日	委嘱状の交付及び会長・副会長の選出
第2回	〃	7月7日	今後の取組みと三重大学準教授石阪先生の地域に対する思い
第3回	〃	8月5日	今後の取組みについて
	〃	9月15日	櫛田川グループ「山里支援プログラム」の実験
第4回	〃	9月16日	やまゆりグループ会議
	〃	10月5日	櫛田川グループ会議
第5回	〃	10月26日	今後の取組み（フォーラム）について
	〃	11月13日	やまゆりグループ「山里の宝物探しウォーク」検証
	〃	11月16日	「山里の未来フォーラム2012準備委員会」
第6回	〃	12月15日	「山里の未来フォーラム2012」について
第7回	平成24年	1月24日	「山里の未来フォーラム2012」について
	〃	2月4日	「山里の未来フォーラム2012」の開催
第8回	〃	2月22日	報告書について
第9回	〃	3月23日	報告書について



山里応援プログラム(平成23年9月15日)



山里の未来フォーラム2012(平成24年2月4日)



山里の宝物探しウォーク(平成23年11月13日)



「山里の未来汁のふるまい」(山里の未来フォーラム2012)

松阪市山里の未来研究会研究員(敬称略)

柳瀬 伸一	飯高地区	
大垣内壽望	〃	(グループ長)
床呂さや子	〃	(副グループ長)
臺 尚	〃	
中尾三紀子	〃	
青木 久	〃	
廣 博子	飯南地区	
野呂ゆかり	〃	
山本 齋	〃	
岩男 安展	〃	(会 長)
佐古 正昭	〃	

榑田川グループ

松本 隆雄	嬉野宇気郷地区 (副グループ長)	
池添友一	〃	
尾上 宗市	中郷地区	
中川 てる	〃	
中川公子	〃	
小牧 正世	大河内地区	
谷口 文雄	〃	
田川 淳	宇気郷地区	
高宮 茂	〃	
大石 正幸	〃	(副会長・グループ長)
西井 玉枝	〃	
丸下 保郎	〃	

やまゆりグループ

松阪市山里の未来研究会「報告書」

平成 24 年 3 月 31 日

松阪市市政戦略部コミュニティ推進課コミュニティ係

〒515-8515 松阪市殿町 1340-1

Tel 0598-53-4369

E-mail commu.div@city.matsusaka,mie.jp